

メッセージ

【僕にとっての作曲】

自分にとっての作曲は、勉強ではなく、仕事でもなく、ピアノの練習とも違う、小さい子にとっての虫捕りのようなものです。

小さい頃、僕は楽譜を書くことが楽しくて仕方ありませんでした。どこかに出かけてきれいな景色を見た時や、いい音や音楽を聴いた時に、自然にメロディーが生まれます。頭の中に流れる音楽をただ書き留めるだけなので、書くのが追いつかなかったり、自分では弾けなかつたりします。

ピアノの三谷温先生が、「作曲を習っていなかったことがかえってよかったのかもしれないね」と言ってくださいました。自分の中から湧いてきたメロディーばかりです。曲が最初に浮かび、タイトルはあとからつけます。妹が数えてくれたところ、約 480 曲あるそうです。



【CD 化を考えたきっかけ】

僕が小さい頃に作った曲を、「CD にしたら」と計画してくれたのは妹です。中 3 冬から高 1 春にかけての、脳腫瘍放射線治療入院時でした。

僕には小さい頃から食物アレルギーや喘息がありました。そして中 2 の秋には脳腫瘍の手術を 2 度受けました。中 3 になり、根治したはずの脳腫瘍の再発がわかった時は「なぜ自分ばかりがこんな病気にかかるのか」とつらくなってきました。その時母が、「確かに旭は病気で大変な思いをしている。旭にしかわからないつらさだと思う。でも、旭は周りの先生方やお友達に恵まれ、みんなに見守られている。それに、作曲ができる。曲作りは誰にでもできることではない。旭だからこそ、の幸せなこともたくさんあるんじゃない？」と言ってくれました。そこで気持ちは少し落ち着きました。

それでも、放射線治療は予想以上にきついものでした。頭痛とだるさはどうすることもできません。痛みや倦怠感を抱えながら病室で一人で過ごす時間は耐えがたく、ドアが開いて誰かが入って来てくれるのを「今か、今か」と待っていました。家族や友達、先生が会いにきてくれた時の嬉しさは格別で、「自分も相手に喜ばれたい、何かの役に立ちたい」と思いました。

その時妹が「お兄ちゃんは小さい頃作曲をしていたから、それを生かせばいい」と提案してくれました。母の励ましと妹の言葉を聞いて、自分が作った曲を役立てていけたら嬉しい、と気持ちが決まっていきました。CD なら、病室でもどこでも誰でも聴けるとも思いました。

ピアノの三谷温先生、メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン他多くの方々が賛同し、協力してくださって、CD 化が進みました。

【CD 収録曲について】

この CD は、ピアノの三谷温先生が僕の考えを応援してくださって、弾いてくださることで完成しました。まず三谷先生に感謝したいと思います。

5～10 歳までに作った作品なので、15 歳の今の僕が聴いて気付くこと、思い出すこともあります。

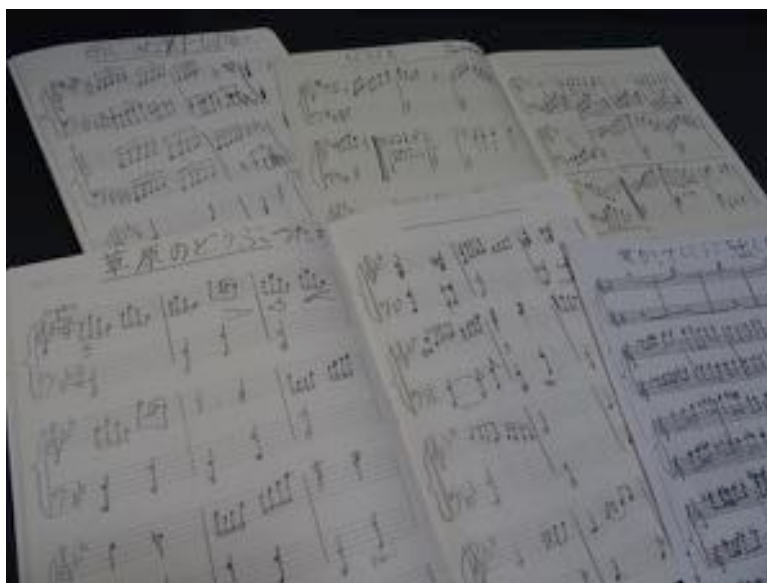
「光のこうしん」…もともと「ほしのこうしん」というタイトルで作った曲で、途中の転調を書き直す時にタイトルも変更しました。5 歳の時の作品です。



5～6 歳の作品

「くじらぐも」…小学校 1 年生の時の学芸会で国語の教科書に載っていた「くじらぐも」を演じることになり、担任の先生に頼まれて作った合唱曲です。

「はるの川」…これとほぼ同じメロディーで違うタイトルの曲を書いています。自分の中で何度も流れたメロディーなのかもしれません。



7 歳の作品

「兄だいのおしゃべり」…妹が思いついたメロディーに僕もメロディーをつなげ、妹とおしゃべりするように作りました。最後に前奏をつけて完成しました。

「おもちゃの兵隊」…2009年の「こども定期演奏会」（東京交響楽団）テーマ曲に選んでいただいた曲です。

「左右対称」…右手と左手が対称に動きます。楽譜を見ると「上下対称」になっています。

「楽しい曲」…作曲家の池辺晋一郎先生とお会いした日、楽しい気持ちがあふれてきて帰りの電車の中で書き始めた連弾曲です。これを聴くと、自分でも楽しくなってきます。



8～10歳の作品

【CDに込めた思い】

子どもが病気で入院や手術となると、その子の家族もつらい思いをします。僕の母は、最初の手術の説明で「言語能力に支障が出る」「旭君は手術室から出た時お母さんの顔を見ても『お母さん』とわからなくなっているかもしれない」と言われ、気を失いました。お医者さんからの説明を聞く場面や、手術を待つ間、病院まで運転する車の中など、家族にとっていたたまれない時間も多くあるのだと思います。そういう時に、少しでも気持ちを和らげるためにこのCDを聴いてもらえたらいいな、と思いました。

僕と同じように難病と闘う子にも聴いて楽しんでもらえれば嬉しいですが、ほかの子もみんな音楽のCDを楽しめるとは限りません。僕はたまたま音楽が好きですが、人それぞれ好きなことは違います。

病気で入院している子どもたちも、そうでない元気な子どもたちだって、それぞれ自分で何かをしたいという気持ちを持っていると思います。その子は何がしたいのか、そのために何ができるのか、ということ、このCDをきっかけに考えていただけると嬉しいです。

